英語の時制現象に関わるSOAの意味役割

樋　口　万里子

１. Introduction

本稿は、SOAと呼ばれる概念に注目し、これを対象化して捉えることの意義について、特に英語の時制現象との関わりにおいて論じる。SOA（State-of-affairs）とは、文（又は時制節）から時制を除いた要素である。例えば（1）は、次の様にSOAと時制を担う要素に分けることができる。

（1）　John met Linda yesterday.　->SOA: [John-meet-Linda-yesterday]

->時制: [meetをmetに実現する形態素]

従来時制の問題とされてきた事例の中には、SOAの問題と考えればより自然な形で説明のつく現象が多々ある。例えば（2）を巡り、Talmy（2000a:284-288）は、下線を引いた文の時制は文の意味が表す時間とは本質的に別の、「当事者のinteractionの時間」を指すと言う。

（2）　John met a woman at the party last week.　<u>Her name *was* Linda.</u>

（Talmy:2000:283:21-22,下線及び斜体付加は筆者）

Talmyの言う「文の意味」とはthe main referentのことであり、ここではthe woman's being named Lindaという継続的状態を指す。しかし、そもそも時制文は時制と他の要素とで成り立っているのだから、時制の意味が文の表す意味とは別個というのは、少し奇妙な話である。論拠はいくつか並べられているが、いずれにしても受け入れがたい。

ただし、（2）の二つの文の流れにおける下線を引いた方の文は「そこで彼女の名を知った」という様にも解釈可能なので、時制がJohnとLindaのinteractionの時間を指すというTalmyの言い方には、ある意味では正しい面も感じられる。しかし、何故上記の文の場合に時制が文のthe main referent の外側にあるinteractionを指すかというと、「注意がそこに向けられるから」とされるだけで、それ以上の説明がない。つまり（2）は、通常考えられているのとは異なるものを

時制が指す特殊例として挙げられているのだが、普通とどう異なり、どの様なメカニズムで特殊性を持つかについては触れられていない。

ここで、思い浮かぶのがHiguchi（1999）等でも紹介したSOAと時制の峻別を手がけたHarder（1996）の提案である。Harder的に見れば、（2）に示される現象は特殊例どころか寧ろ時制の機能の本質を端的に示す例となる。しかもそこからは、（2）の下線文の時制がこの場合interactionの時間と重なり得ることも導くことができ、かつ文のreferentの一部とも捉え得る。この様な見地から、本稿は先ず（2）を巡るTalmy（2000）の議論を批判的に検討し、Harderの提案に沿って（2）を捉え直す。更に同じ手法で全く違うタイプのいくつかの事例にも取り組み、我々のSOAイメージ構築のあり方やその役割を捉えることにより、時制現象をより正しく分析できることを示す。

２.１. 二つの時制観：出来事説vs.指示機能説（Harder:1996）

従来の英語の時制研究における最大の問題点は、Harder（1996）も指摘する様に、「時制を担う形式が、動詞の表す事態の生起時間を指す」と考えられてきたことにある。これを「出来事時説」と呼ぶことにしよう。例えばIt flashedでは、時制はitが「ピカッと光る出来事が起きた」過去の瞬間を表すという訳である。出来事時説はいかにももっともらしく聞こえるし、初歩の学習段階で刷り込まれている時制観とも言えるが、同時に様々な問題や矛盾も抱えている。その一つとしてHarderは（３a,b）を挙げ、以下の様に指摘する。

（3a）　Albatrosses *are* large birds.

（3b）　Albatrosses *were* large birds.　（Harder:1996:330）

出来事時説的に見ると、（3a）の時制は「過去から現在・未来に亘り普遍的に広がる時間」を指すことになる。しかし、（3b）の時制の指示対象も同じ場合がある。そうすると、時制以外に違いのないこの２つは全く同義となってしまい、（3a）と（3b）の間に感じられる違いを反映できない。勿論Quirk et al.（1975:176）やPalmer（1987:39）、Leech（1987:13）等、従来の文法学者も言う様に、「（3b）の話者は現在時点の状態を念頭には置いていない」かもしれない。しかし、それと出来事時説との折り合いのつけ方は明確でない。話者が今もアホウドリが大きな

鳥だと認識していても、(3b)は不適切な文とはならない。先程の(2)でも同様で、女性の名前は現在も引き続きLindaだと話者が認識していて構わないし、寧ろその方が自然であろう。従って出来事時説ではやはり行き詰まってしまう。

これを解消できるのが、時制の意味を「SOAの表す意味内容を位置づける時点を確認する様に情報の受け手に指示する機能」とする、Harder(1996)の主張である。即ち、出来事説で時制の指示対象とされた(3a,b)の「過去から現在・未来に亘り普遍的に広がる時間」は、[Albatrosses-be-large birds]と表されるSOAの側の意味内容ということになり、時制の意味とは本質的に別である。時制は、単に文脈や世間知に照らし、SOAを結びつけて理解すべき時点を確認するように指示するだけである。そう考えると、先程の様な問題は初めから存在しないばかりか、(3a)と(3b)の共通点と相違点を無理なく説明することもできる。両者に共通するのはSOAである。両者がSOAを共有するからこそ、(3b)の場合にも発話時現在もアホウドリが大きい鳥ということが継続中の場合があるのである。勿論、(3b)の情報の受け手が結び付けるのはある過去時点だけだから、特に現在には関知しない。だから発話時ではSOAの事態は終了していてもよい。即ち(3a,b)の違いはSOAを当てはめる時点だけにある。従って時制節は時制とSOAとで成り立っており、(3a,b)の意味もそれらの相互作用で成り立っていることになる。

Harderの(1996)の時制研究に関する最も大きな功績は、この様に時制節を構成する意味のまとまりからSOAという概念を一つの概念として括りだし、対象化することによって、時制の意味機能のいわば外堀を描き出したことにある。このSOAについては、それ以前はSue's meeting Jo等の様な不定形で言及されることはあっても、それを纏まった一つの概念として捉えられることが無かった。時制の意味役割が混沌としていたのはそのせいでもある様に思う。例えば文法書によっては、(4)ー(6)はuniversal present, habitual present, state present等の呼称が物語る様に、まるで現在時制の特殊用法または下位区分であるかの様に扱われることがある。

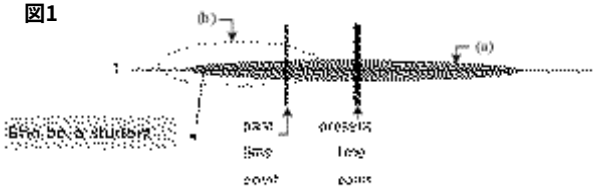
（4）　**2** *times* **2** equals **4**.　[universal present]

（5）　He *goes* to church every Sunday.　[habitual present]

（6）　She *is* a student.　[state present]

しかし、（4）の普遍的性質や（5）、（6）の習慣や状態をSOAの意味とし、（4－6）の時制はいずれもSOAが現在当てはまっていることを表すと考えれば、一貫した捉え方をすることができる。例えば（6）のSOAのイメージは図１の（a）の灰色の楕円部分の様なもので、現在時制はそれが現在も成立していることを表す。

図1



もし（6）の主動詞がwasであれば、聴者が確認可能と話者が認識する過去時点で成り立っていることを表すので、[She-be-a student]の楕円の広がりは、（a）の場合もあれば（b）の場合もあり得る。

更にHarder説は、これまで説明がつかなかったことも単純明快に処理できる。

（7）　He was ill.

（7）の様な、時を示す副詞も文脈もない過去形の文は、それ単独では不完全な感じがする一方で、自然な場合もある。その理由を説明できる時制理論はこれまで存在しなかった。ところが Harder的に時制を捉えれば一目瞭然である。（7）が自然な場合というのは情報の送り手と受け手との間で、SOAを結びつけるべき過去時が了解されている場合である。不完全なのは、単に（7）だけではSOAを当てはめるべき時点を割り出す手がかりがなく、時制の指示に応えられないからと考えられる。もし時制が出来事が生じている時間を指すのなら、（7）はそれだけである時間帯を指せる筈である[1]。ここからもSOAの位置づけ作業を行うのは情報の受け手の方だと考えた方がよいことが分かる。

1）He is illの様に現在形では（7）に感じられる様な不完全さがないのは、通常発話時現在というのは想定・確認しやすいからであろう。書き物や手紙などの場合、しばしば日付を確認するように、発話時現在かいつかわかりにくい状況では、（7）と同じような不完全さを経験することがある。

２.２. Talmyのinteraction説vs. Harderの指示説

さて、上記を踏まえ、（８a,b）の下線部文が共有するSOAについて考察を進めたい。

（8a） John met a woman at the party last week. Her name *was* Linda.

（8b） John met a woman at the party last week. Her name *is* Linda.

（8a）の時制は過去だが、発話時現在も女性の名前は Lindaであって構わない。その場合SOAの表す事態は現在も生じている訳だから、出来事説的にみれば、表象と形が乖離していることになり、しかも（8a）と（8b）の時制は同じものを指すことになってしまう。（8a,b）の違いは時制にしか見あたらないので、もし２つが同義だとすれば、（8a）では前文の出来事とより結び付いているように感じられ、（8b）では現在時との関連が感じられるという違いを説明できない。Talmyがこの場合の時制の指示対象を文の外に求めたのは、「出来事時説」の持つ矛盾のせいだと言えるだろう。

一方Harder的に考えれば、全く問題はない。名前に関する継続的な状態は我々の通念から来るSOAの意味内容の一部であり、時制の意味とは別である。両者に共通する[Her name-be-Linda]を当てはめるべき過去時点と言えば、前文の表わすJohnとLindaの会った時が想起できる。「出会い」とは何らかの「やり取り」を意味するので、この場合は、Talmyが言う様にinteractionの時間と言っても構わないかもしれない。しかし、それは文の意味に含まれるものであって、文外のものではない。SOAを前文のJohnとLindaのやり取りの時間と結びつける作業を行うのは、あくまで情報の受け手であるが、受け手がそのinteractionの時間を想起するのは、文の一部を成す時制の指示機能による。

Talmyは更に、彼の言うinteractionの時間が「文の指す時間帯」の一部とも本質的に別個で重ならないことを示そうとしているが、そこにもまた問題がある。

（9a） When *was* her plane going to leave again tomorrow?

（9b） When *is* her plane going to leave again tomorrow?

Talmyは、（9a,b）は未来の瞬時の離陸という出来事を表すのに対し、時制は過去や現在を表すので完全に別だから、時制の指す時間と文の指す時間が別だということを示す証拠となると言う。しかしこれは全くmisleadingな捉え方と言

わざるを得ない。(9a,b)のleaveは不定詞形であり、基本的に時間的位置指定は特にない概念である。未来という解釈は tomorrowという語によって生ずるもので、to以下はgoing toを補う要素に過ぎない。そもそも(9a)の主動詞はwasであり、going toと組合わさることによって、文全体としては、過去のある時点で意志決定を含めた出発の準備段階が進行していた途中の状態を意味する。こう考えれば(9a)の時制が文の意味の外側にあるものを指すとは言えない。

(9a)の解釈として、Talmyの言う様に、時制がidentifyするように指示する時点位置を、参与者のやり取りの時間と想定することは可能かもしれない。しかし、過去時制自体は、何らかの出来事の位置が現在以前の無限の時間のどこかにあるという以上のことは表さない。出来事の位置を意識するのはあくまで(9a)の情報の送り手と受け手である。またTalmyは(9a,b)等におけるagainについて、当該の質問が繰り返しとなるという話者の意識を表す marker だから、「相手に飛行機の出発時刻を聞く」というinteractionの存在を裏付けるものとも言っている。しかしだからといって時制が直接interactionを指している根拠にはなり得ないし、interactionという概念の輪郭も曖昧である。(9a)は単に自分自身の記憶を再確認しているだけかもしれないからである。

次にTalmyは(10)を挙げ、この様な副詞節が続くと容認不可能になるということも又、斜体部文の時制が文外部のinteractionの時間を指している証拠となると言う。

(10)　John met a woman at the party last week. *Her name was Linda* {*<u>while he was there</u>/ *<u>when he asked for it</u>/ *<u>when she told him.</u>}

下線部分が斜体部分の文の表す状態の一部ならば、非文となる筈はないという論法である。これも奇妙な議論である。というのも(10)の第二文は必ずしも容認不可能ではないからだ。例えばLindaがパーティで偽名や芸名等を使う場合や、最近改名した等という場合である。つまり、時間限定の副詞節が加わるとTalmyの意図する解釈ができないというだけなので、非文とするのは不適切である。その解釈ができないのは、人名を一定のものとみなすことと、時間を限定することとが相容れないからであって、時制の問題ではない。

Talmyは(10)とは違い、(11a)ではinteractionの時間を指す場合と指さない場

合があり、指さない場合には(11b)の様に時間限定の副詞節が付加可能だと述べる。

(11a) I was in Yellowstone Park last year. Old Faithful *spouted* regularly.

(11b) I was in Yellowstone Park last year. Old Faithful *spouted* regularly(at least) while I was there.

しかし、(10)タイプと(11)タイプで何が本質的に異なるのかについての言及はない。上述した様に、(10)の場合も可能な解釈は存在するのだから、両者の間には特に明確な差異は見あたらない。副詞節の付加可能性、即ち時間限定読みができるかできないかは結局 SOAの内容解釈の問題であり、基本的にはSOAの内容の継続性に区切りを意識するかしないかの問題と言えるだろう。即ち、(11a)は下線部文のSOAでは単に間欠泉噴水の規則性を表しているので、基本的にはその継続性に区切りを意識しない解釈も可能だが、少なくとも滞在中はそうだったという様に区切って考えることも可能である。

Talmyが出来事時説の限界を示す格好の例に注目しているにも関わらず、(８a,b)の時制の意味を捉える上で、本質論へ向かうことなく、場当たり的とも言える説明に陥ってしまった背景には、やはり出来事時説の根強さがあるだろう。それ故時制とSOAの役割分担が曖昧で、SOAとして捉えるべき部分を文の意味と捉えてしまった様に思える。

さて、本セクションでは、(２)の時制を特別視するTalmyの見解に疑問を呈し、SOAと時制の意味役割を区別しHarder的に時制を捉えれば、(２)を例外的に扱う必要もなく、的確でかつより包括的に現象を捉えることができることを示した。

３.１. SOA

上述した様に、Harderの提案するSOAの理解は、時制現象を的確に捉える上で非常に重要である。しかし残念な事に、Harder(1996)ではその大枠が示されたのみで、例えば予定を表す(12)や歴史的現在と呼ばれる(13)を始め、多様な単純現在の具体的現象をどう取り扱うかについてはまだまだ不鮮明な部分が大きい。

（12）　The train *leaves* at 7 tomorrow morning.　（予定）

（13）　This guy *comes* up to me yesterday and *says* he wants a loan.（歴史的現在）

これらでは出来事の生起自体は未来や過去にあるにも関わらず現在形が用いられているので、勿論出来事時説でもお手上げである。他にも He runs の様に現在形であるのに、現在の動作は表さないものもある。出来事時説的に捉えようとすると、英語の時制はなんとも得体のしれないものの様で、包括的説明など不可能に見えてしまう。実際、Bybee, Perkins & Pagliuca（1994）等は、英語の現在形や過去形は時制とは言えないと述べ、Wolfson（1979, 1982）も同じ理由で、時制に意味を見出そうとする事自体に意味がないとさえ言う[2]。しかしそれは結局のところ、出来事時説的な時制観に問題があったと言うべきであろう。

本稿では次に、動詞の表す出来事の生起というよりは SOA 全体の意味イメージに注目し、これを明確化することにより、３.２.２で（12）をより自然な形で捉え、３.３で（13）に関する従来の説明に生じる問題を解決できることを示したい。

３.２. SOAイメージの構築

（12）や（13）の SOA を捉えるためには、二つのキーポイントがある。一つは SOA の aspect と単純現在形の関係、もう一つは SOA イメージの抽象性である。いずれも我々の世間知や文脈を含む使用環境と密接に関わりながら SOA のイメージ構築に関わる[3]。

２）英語の現在形や過去形が時制を表すかどうかを議論するには、まず全ての言語に共通する時制とは何かということを定義しなければならないが、それは本稿では議論の対象としない。ここでは、一般的にも英語の時制を担うと目されてきた、形としては音を伴わない形（zero form）である現在形と規則又は不規則の過去形とを作り出す形態素の機能を問題とする。

３）相の対象となる事態は、山田（1984）が述べているように、「話者による知覚あるいは認識と言語化を前提とした」イメージに関る。たとえば、「午前中ずっと本を読んでいた」と言っても、実際はその間に電話がかかってきたりコーヒーを飲んだりしたかもしれないが、そのような中断は問題にせず、持続性だけを取り上げる。また、“ cough ” が表すものは一瞬の動作と見なす場合と、スローモーションにしたイメージ、何度か咳を繰り返すことなどがあり得る。

３.２.１ SOAのAspectと単純現在形

SOAは文の意味要素であるので、その要は動詞にある。動詞とは「時間が流れることによって捉えられるイメージを表すもの」であり、そのイメージは大きく分けると図２の様に「時の流れにおいて変化が意識されるもの」と図３の様に「そうでないもの」とに分類できる。前者が perfective、後者がimperfectiveと呼ばれる[4]。これらはSOAのイメージ区分でもある。

図2

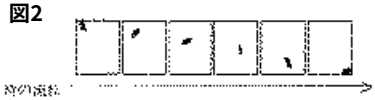


図3

例えば、(14)の場合のmetは動作を表すので変化がイメージされ perfective、wasはいわゆる状態であるのでimperfectiveである。

(14(=(8a)))　John *met* a woman at the party last week. Her name *was* Linda.

ここで大切なことは、主動詞が動作動詞でも SOAはperfectiveとは限らないことである。(15)の様にSOAレベルで習慣を表していれば、この meetはimperfectiveである。

(15)　John *meets* Ann everyday.　SOA: [John-meet-Ann-everyday]

この様にSOAのaspectは、あくまで我々が解釈する SOA全体の意味イメージの性質であり、SOAのイメージ構築には文脈や参与者やその他の要素も関わる。(16a)の様にSOAだけを単独で取り出せば、実際には aspectは漠としている。

４）ここで挙げているのはaspectを最も大きく分けた場合だが、perfectiveの方はそのあり方を捉えて次の３つ、又は局面を捉えて４つに細分類することも出来る。

accomplishment:　完成という終止点に向かっての動作He painted a picture.
activity:　任意の時点で終止・開始が可能な活動He swam for an hour.
achievement:　達成の瞬間に意味の焦点があるHe died an hour ago.
（achievementは更に、He was dyingのような、達成の瞬間を拡大して考えやすいものと、punctualと呼ばれる１回きりの動作としては、その途中の過程をイメージしにくいものに細分化することもできる。後者は、繰り返しやスローモーションでない限り、進行形を取ることができない。The bomb was exploding at ５.）
inchoative:　起動相Joe began filing the mail.
durative（continuous）:　継続相Joe kept filing the mail.
terminative:　終止相Joe finished filing the mail.
iterative:　反復相Joe kept filling pies.

（16a）　［Old Faithful-spout］

（16b）　I was in Yellowstone Park last year. Old Faithful {*spouted/spouts*} regularly.

文脈がなく過去形である場合、spoutは典型的には動作動詞なのでperfectiveなイメージが優勢かもしれないが、可能性は両方ある。前文と併せて解釈する場合では、SOAの時間的位置の確定の手がかりとして、イエローストーンが国立公園だという世間知が働き、「訪れたという動作」としての解釈が浮上し、その際に目にした間欠泉の動きと結びつきやすい。しかし、滞在中に眺めた動きの規則性の意味でimperfectiveな読みもできる。実際にはイメージの確定は文脈などの他の要素に委ねられることになる。しかし、ここにregularlyという副詞が加わると、規則性の意味が強まり、imperfectiveな解釈が自然となる。この意味のSOAではspoutは動作ではなく、規則性が継続している状態を表す。

一方、主動詞が現在形であればSOAは常にimperfectiveな読みが要求される。基本的に動作が始まって終わるまで等の変化、即ち perfectiveな事態は、時間が流れることによって初めて捉えることができるものであり、一瞬ではその全体像を捉えることはできない。たとえ瞬間的動作の場合でも、それを言葉にして描く際には既に当の動作は終わっている筈だからである。それに対し、imperfectiveな、変化のないイメージは、どの瞬間を捉えても同じである。一秒前も過去は過去であり、現在形で表されている事態というのは現在という瞬間で認識できることである。従って、現在形では、 imperfectiveでなければ捉えることはできない。従ってOld Faithful spoutsの場合、情報の受け手は何らかのimperfectiveなイメージでこの文を理解しようとし、間欠泉の規則性が有力候補となる。更に副詞のregularlyがその意味を確定的にする。この様なSOAの内容が現在時点で成立しているというのが、Old Faithful spouts regularlyの文の意味ということになる。

以上、過去形の場合は、perfective/imperfectiveの両方のSOAイメージが可能で通常は世間知や使用環境でイメージが定まるが、現在形の場合は形が何らかのimperfectiveな解釈を要求することを述べた。

3.2.2. SOAイメージの抽象性

imperfectiveな事態イメージにも、I know itの様な具体的状態の場合や、先程のOld Faithful spouts regularlyの様な規則性の継続やA bird lays eggsの様な普遍の真理等、具体的でなく抽象的な内容の場合がある。更に、抽象的な内容にも使用環境によって実に様々な場合がある。そのいくつかをこのセクションで考察する。

Old Faithful spouts regularlyやA bird lays eggs等のSOAをimperfective に解釈させる要因の一つは、単純現在形という形である。現在の一瞬でも成り立っているimperfective なSOAしか単純形では実現しないから、現在形は原理的にimperfectiveな事態しか表せない。ところが、表面上はこれに反している様にみえる場合もある。例えば、(17)の様な実況中継の場合、その動詞は具体的動作、即ちperfectiveな事態を表している様にみえる。

(17) He *catches* that pass and the game *is* tied.

事実このタイプの文は出来事の生起とその描写の発話がぴったりと一致するという意味で、true present等と呼ばれることもある。そう考えれば、出来事時説的に捉えても何ら問題がない様に見えるかもしれない。しかし、実際には、描写対象の動作と描写の発話が一致するなどということはあり得ない。発話と動作が同時ということは、言い始めると同時に対象動作も始まるということになる。単純形は動作の全体像を描く形であるので、それを描写し始めるには、動作をひとまとまりのものとしてイメージし、ふさわしい動詞や他の言葉を選択する必要がある。勿論、脳は瞬時にこれらの処理を行うのだが、いずれにせよ発話を始める際には描写対象の動作は終わっている筈である。では何故ここには過去形でなく、現在形が使われているのだろうか。 Langacker(1991)はこの現象を一種のconventional fictionと呼び、(17)のプレーヤーがこの発言の直後、実際にはボールを落としてしまい、同点にはならなかったというエピソードを紹介している。注目すべきは、そういう場合でもこの発言がアナウンサーの失言ではないことである。併せてLangackerは、この様な実況中継タイプの単純現在形は、突発的事故の描写にはなり得ないことも指摘している。例えば、試合中に爆発事故が起きてもThe scoreboard explodes!等とは言えず、その際に

は The scoreboard just exploded! としか言えない。このことからも（17）は目の前の実際の動作の描写ではなく、「捕れば同点」という瞬間的局面（言い始める前）での、アナウンサーの描く試合運びのシナリオを表現するものと考えられるのである。

話者が頭の中で描く筋書きの表現という意味では、次の様な、手品の口上やレシピ、 取扱説明書や道案内、物語や映画の筋書きや歴史年表等を表現する際の単純現在形も同様に考えることができる。

（18a） Now I *take* up this pen in my hand. Presto! It disappears, and you *see* nothing in my hand. （手品の口上）

（18b） First you *get* a big mixing bowl and then .... （レシピ）

（18c） To turn the heater off, you *press* down the button. （取扱説明書）

（18d） You *go* straight down the street and *turn* right. （道案内）

（18e） That night Cinderella *goes* to the palace. （物語の筋書き）

（18f） Richard Kimble, a doctor framed for the murder of his wife, *escapes* to track down the real killer, while fleeting his determined pursuer.（映画の筋書き）

（17）や（18a-f）に共通して言えることは、これらは実際の出来事というよりは物事のあり方を表しており、主動詞での表す動作は、現実の時間の特定の位置を持たないことである。即ち時制は、動詞の表わす出来事の時間的位置ではなく、SOA 全体の内容が現在の一瞬で成立していることを表しているのである。SOA の内容は物事の筋書きや手順であり、あり方の一種なので、基本的に一定で imperfective である。よって現在という一瞬でも捉え得る。物語は、虚構なり現実なりの世界で起きたこととして通常過去形で語られるが、その構成そのものは、知識の蓄積の一部として一定である。だから発話時現在の一瞬でも成立っている場合、現在形で表され得るのである。

同様に（19a-c）の主動詞も、「行為」そのものを表しているのではない。、

（19a） John *writes* to say that he can't visit us this week.

（19b） The **7** o'clock news *says* it's going to be cold tomorrow.

（19c） I *hear* that the poor little girl lost her mother.

（19a,b,c）の主動詞は、それぞれ手紙やニュース等の話で得たある内容が、「現

在話者の知識としてある」ことを意味する。情報の存在が一種の状態として表現されているのである。一種の状態として現在の一瞬でも捉えることができimperfectiveだから単純現在形が使われていると言えよう。

こうしてみると、未来の出来事を表す現在形と言われてきた、次の様なscheduleを表す(20a,b)の類にも同様の説明が成り立つのがわかるだろう。

(20a[=(12)]) The train *leaves* at **7** tomorrow morning.

(20b) First we *walk* around the town and have lunch together. Then you go shopping and I *take* a boat tour. How's that?

ここでleaveやwalk, go, takeが表す動作は生起するとすれば未来ということになるが、SOAは、頭の中で考えている計画や予定を表現している。ここでの時制はこのSOAを現段階のものとして考える様に指示していると考えた方がよい。この様に単純現在形と結びついているSOAは、主動詞が動作動詞でも様々な抽象的imperfectiveイメージを作り出している。

3.3. 歴史的現在のSOAと文脈

以上を踏まえた上で、動作動詞が使われ単純現在形を取る(21)の使用環境に注目しつつ、この場合のSOAがどのような抽象的imperfectiveイメージを持っているか考えてみたい。

(21[=(13)])This guy *comes* up to me yesterday *and* says he wants a loan.

歴史的現在は、従来「視点が出来事時に移動し、事態があたかも話者の目の前で起きているかの如く生き生きと描くもの」であり、特殊なdiscourseの問題として処理されてきた。Harder(1996)もLangacker(1991)もこれを踏襲している[5]。しかし、一見自然に見えるこの説明にも様々な問題点がある。まず、Wolfson(1982)が力説している様に、多くの実例を検証してみると、歴史的現在の部分がそれ以外の箇所に比べ取り立てて生彩があるという訳ではない。致

5) Langackerはイメージの中では、動作の長さが自由に操作できるので発話時の一瞬と同時ということがありうるからだと言うのだが、出来事を思い出して表現する場合も、先ず思い出してからそれを表現する言葉を探して言語化する訳だから、イメージとそれを表現する発話が同時に始まるというのはありえないはずである。

命的な点は、(21)の様な歴史的現在が動作動詞で単純現在形を取っていることにある。上述した様に動作は一瞬では捉えられないので、目の前の動作の場合でも、それを描写するには現在進行形か終了後に過去形を用いるより他はない。従って、仮に視点が過去時点に移って今現在動作が起きているかの様に描くというのであれば、そこに単純現在形が使われる筈はないのである。

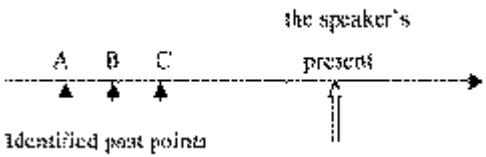
　では何故歴史的現在では動作動詞が単純現在形で生じうるのかというと、次の様に考えることができるだろう。歴史的現在が生じるのは、既に先行文脈やコンテクストによって、ある実際に過去に起きたと理解されている出来事の成り行きや背景を、脚本のト書きの様に総括的に相手に説明する部分である。その説明内容というのは、先ず何が起きて次に何が起きるかというエピソードの構成や順序である。物語や出来事の構成や順序自体は、一旦意識の上で構成図的にイメージされれば、自分の部屋の物の位置関係をイメージするのと基本的に同じである。つまり、物語の粗筋等と同様、一定で imperfective である。だから構成図は発話時の一瞬で切り取って捉え、単純現在形で描くことができるという訳だ。例えば、(22)の様な SOA で構成されたエピソードがあるとしよう。

(22)　A.[John-go-to-the super market]

　　B.[he-bring- some groceries -to-the register]

　　C.[he-realize-that-his wallet-be-in the car]

図4

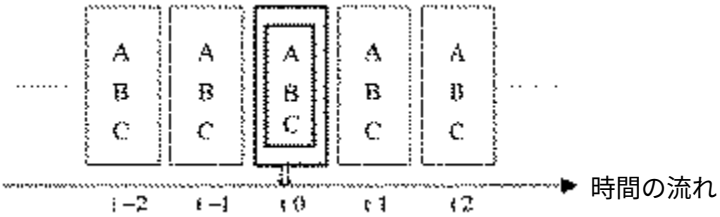


これは図４の過去のA,B,Cの時点で起きた出来事として、(23)の様に過去形で語ることもできる。

(23)　Yesterday was a really bad day for John. He *went* to the super market. And when he *brought* them over to the register, he *realized* that his wallet *was* in the car. ....

しかし、これを図５の様に総括的にA,B,Cというあるエピソードの構成内容としてみると、それ自体は時間が流れても一定である。従って、発話時の一点でも成立していることとして捉えることができ、(24)の様な歴史的現在として実現しうると考えられる。

図5



(24) Yesterday was a really bad day for John. He goes to the supermarket and when he *brings* some groceries to the register, he *realizes* that his wallet's in the car. It was only 5 minutes before the store closes. So he ran to his car and did not notice the car that hit him.

歴史的現在や(25)の様な歴史年表の場合、動詞が表す出来事は実際に起きた事である。

(25) Hitler loses the Second World War. (歴史年表)

エピソードや歴史上の出来事の順序の構成としてみたSOAの中身は、書物や記憶に刻まれた内容として、現在も話者の知識の一部に状態的に存在する。

状態的という点では、話者の理解における世の中の物事のあり方や仕組やメカニズムと同じであり、写真の様なものとも言える。次の(26a,b)は、別々の新聞に掲載された全く同じ挿入写真(左)に添えられた説明書きである。

(26a)Lance Armstrong *hoists* his son, Luke, after his second Tour de France victory.

(Los Angeles Times, July 24, 2000)

(26b)Lance Armstrong *celebrating* with his son, Luke.

(The New York Times, July 24, 2000)

写真が描く出来事は常に過去のものであるが、写真としては現在目の前で存在し現在のものということもできる。（26a）の単純形は、動きを一瞬で捉えかつ時間が流れても変化しない、写真自体が持つ静止画的イメージを捉え、（26b）は同じ写真を、動きの途中のある一瞬のものとして捉えたもので、それにふさわしい現在分詞形が選ばれている。この様に、物理的には同じ事態でも我々は異なるイメージで捉え、それに応じた表現を選ぶことができる。大切なことは、言葉が表現するのはそのイメージだということである。

歴史的現在の場合は、情報の受け手が過去のエピソードとして理解している場面で登場するし、歴史年表や写真の場合もそれぞれの使用環境がある。ここでは、単純現在形で実現しうる SOA内容は、現在という瞬間で成り立っていると認識できる事態でなければならないので、その使用環境によって何らかのimperfectiveな解釈が前提条件となるということを、いくつかの例を通して検証した。

4.1. SOAイメージを捉えるメリット：総称文への応用

最後に総称を表す単純現在形の進行形との相補分布関係を通し、構文の意味や参与者や文中のその他の要素、及び我々の抽象的な物事の捉え方や世間知等の要素を含め総合的にみてSOAイメージを捉える利点を示したい。

Langacker（1996）は、（27a,b）の容認性の相違は、（28a）タイプの総称文のprofile（意味イメージ）が複数の出来事であるのに対し、（28b）タイプでは単一の出来事がprofileされるところから来ていると主張する[6]。

（27a） Cats are being born with extra toes these days.

（27b） *A cat is being born with extra toes these days.

（28a） Dogs bark.

6）Langacker（1996）では、ここで「複数」としている概念に対してmultiple、またはhigherorderという言葉が使われているが、この用語自体は、総称文の様に抽象的な場合も単に複数の主語を持つ具体的出来事の場合にも用いられている。複数の出来事というのは時間的広がりがあり、の途中のイメージを描きやすいので進行形と相容れるというのはいいとしても、なぜprofileを単一の出来事と捉えるべきなのかや、profileが単一の出来事だどうして進行形と相容れないのかについては説明がない。単一の出来事にも時間的広がりは存在するように思えるが、そこに総称的意味が出てこない論拠は乏しい。

（28b） A dog barks.

しかし、（28b）の profileを単一の出来事とすべき理由は示されていない。また、Langackerは（29a）の様な習慣を表す文の profileも、（主語の単複に関わらず）複数の出来事としているが、その論拠としては（29b）の様に進行形が可能であること以外には述べられていない。

（29a） My {cat stalks/cats stalk} that bird every morning.

（29b） My {cat is stalking/cats are stalking} that bird every morning.

（29a）の特に主語が My cat である場合の profileを複数と捉えるのであれば、何故（28b）の方は、複数ではないのだろうか？（28b）の単一の profileが実際に生じる複数の出来事を代表すると言うならば、（29a）の（特に単数主語の）場合も単一の出来事が複数の出来事を代表すると何故言えないのだろうか？いずれにしろ、今ひとつ説得力に欠け、説明が不足している。

そこで本稿では、（28b）タイプの総称文の SOAの意味内容に今一歩踏み込んでみることによって、それが進行形と相容れない理由を明らかにしてみたい。まずは進行形の意味を概観し、次に（28b）タイプの SOAを分析し、更に（28a）や（29a）のタイプとの比較を行う。

４.２. 進行形のメカニズム

進行形というのは、be動詞にing形の動詞を付加することにより ing形の perfectiveな事態の途中の状態を表す構文である。従って ing形の動詞は perfectiveでなければならない。状態動詞が基本的に進行形にできないと言われているのは、状態動詞というのは典型的には imperfectiveな意味イメージを持つからである。しかし、状態動詞のイメージは SOAのレベルでは常に imperfectiveとは限らない。（30a,c）の場合は、いわゆる状態動詞とされている resembleや liveの典型的意味イメージのまま単純現在形として実現しているので imperfectiveだが、（30b,d）では、ing に接続する動詞に perfectiveな読みが要求される。（30b）の場合は、副詞の助けによって類似性の程度変化の解釈が醸し出され、（30d）の場合は liveで表された状態の始まりや終わりの意識と結びつくことによって perfectiveな読みが可能となる。このタイプが「一時的状態」を表すと言われ

ているのは、この故であって、事態の長短の故ではない。

（30a）　He *resembles* his father.[He-resemble-his father]

（30b）　He *is resembling* his father more and more these days.
[He-be-resembling- his father more and more these days]

（30c）　He *lives* in Tokyo.　[He-live-in Tokyo]

（30d）　He *is living* in Tokyo.[He-be-living-in Tokyo]

逆に walk **は基本的には動作動詞と言ってもいいが、**（31a）**では単純現在形が** imperfective **の読みを要求するので習慣の意味が浮上し、** everyday **によってその意が確定的となる。**

（31a）　He *walks*（everyday）.　　[He-walk]

（31b）　He *is walking.*　　[He-be-walking]

（31c）　He *is walking* a lot these days [He-be-walking-a lot]

一方、（31b）**の** walk **は進行形に生じているので** perfective **の読みを妨げるものはなく、今実際に歩いている途中の意の場合もあれば、今のところ続いている習慣の解釈も可能であり、いずれの場合も** perfective **である。後者の解釈は**（31c）**では副詞によってほぼ確定する。**（31a,c）**はいずれも現在の習慣を表し、抽象的状態である。しかし、**（31a）**では習慣に区切りを意識しないのに対し、**（31c）**では意識するという点で対照をなし、基本的に**（30a）**と**（30b）**や、**（30c）**と**（30d）**の対照と平行である。**

この様に進行形は ing **形の動詞の解釈に** perfective **であることを要求するので、**SOA **の意味内部または文脈にその解釈を支持する要素がなければ、**（32）**の様に非文となる。**

（32）　*He *is resembling* his father. [*He-be-resembling-his father]

（33a）**は、生きている人間についての描写であれば、** lie **は動きの途中の一場面として** perfective **に解釈されるのが自然であり、進行形が普通である。**

（33a）　Fred *is {lying/*lies}* on the beach right now.

（33b）　He *lies* in his family plot.

（33c）　Belgium {*lies/* is lying*} between France and the Netherlands.

（33d）　He *lies* in the grass.

勿論、単純形が必ずしも容認不能という訳ではなく、そこに葬られているイメージならば可能であろう。ただし死体は仮に置かれているだけで移動が意識の中に浮上すれば、perfectiveなイメージとなり進行形の方が選ばれよう。従って、単純形がよりしっくりくるのは動きを意識することのない(33b)の様な場合である。(33c)の様な場合は国盗り合戦のパズルでもない限り、SOAのaspectをperfectiveにはイメージし難く進行形はかなり考えにくい。写真に納められている状況でも、生きた人間が横たわっていれる状況を描写するというだけなら(33d)の様に単純形で具現することはまずない。しかし、これを何かの証拠写真等として提示する場合や、区切りを念頭におかない習慣的行為と見る等の場合では、そのimperfectivityに焦点があるので、(33d)も可能となる。

この様に、ing形の動詞にperfectiveな解釈をサポートしたり、その可能性を生み出したりする要素としては、SOA内の要素や文脈だけでなく世間知も関わる。そして、(27b)が容認できない理由もこれと全く平行に説明できるというのが筆者の考えである。

4.3. 総称や習慣を表すSOA

(28a,b)の形式上の違いは主語が不定冠詞付きか無冠詞複数かというところにあるが、総称文として見た場合の意味の相違もそこから来る。(28a)タイプの無冠詞複数主語文は、その主語名詞で呼ばれるものの集合のうち、いくつかの部分集合に関する共通性を表すに過ぎないかもしれないし、もっと多く、或いは殆ど全ての場合に当てはまることかもしれない。単に最近何回か目にする現象を傾向として表現しているだけかもしれないし、共時的・通時的に例外が多くても構わない。従ってその現象に特に始まりや終わりを意識しない場合もあれば、それを意識した一時的現象として捉える場合も考えられる。前者の場合は単純形で、後者のイメージは進行形で具現される。

(29a,b)の習慣タイプも同様で、そのSOAの内容は、ある(又は複数の)個体の習慣として理解する訳だから、当然いつか始まったものであろうし、そのうち消滅する可能性も当然考えられる場合が多いだろう。その可能性を特に意識しなければ単純形という形で、最近始まってとりあえず最近続いている現象と

イメージする時は進行形という形で具現化される。

それに対し、(28b)はその名前で呼ばれる主語の個体が共時的かつ普遍的に複数あって、その中のどの任意の個体にも当てはまるという意味で総称的である。普遍的ということは限りを意識しないということだから、一過性の事態の途中を表す進行形とは相容れないし、過去形とも相容れない。期限的なものとは相容れないので、如何にお膳立てをしようとも、(34a,b,c)はいずれも総称文的な意味では理解不能な文である。

(34a)　Once upon a time, there was a peaceful village near the sea. *In those days, a cat was able to talk. ...

(34b)　*A cat was born blind those days.

(34c)　*A cat is born blind these days.

総称文にしろ、習慣を表す場合にしろ、その SOA は、複数の出来事から導く演繹的一般式の様なものである。問題は profile の単複というよりは、SOA の一般式的 validity に限定性を意識できるかどうかである。いずれにせよ、(27b)の容認不能性は SOA の要素から考えられる限定的概念と馴染まない性質と、限定性を要求する進行形構文の不一致から来ると考えた方がより自然である様に思われる。そこに我々の世間知が大きく絡んでいることは言うまでもない。

不定冠詞主語の総称文には(35)の様なものがあるが、どの鳥も卵を産むのではなく、雌で健康な成鳥だけであろうから、任意の鳥についての性質として杓子定規に捉えると雄鳥は鳥ではないことになり、おかしな事になる。

(35)　A bird lays eggs.

しかし、我々は通常これを「鳥は(胎生でなく)卵生だ」の意味で、例えばほ乳類と比較における鳥類の生殖方法の表現として理解する。これは我々が、主語や動詞やその他の個々の意味要素の足し算的集合と言うよりは、文脈に照らしつつ、話題との関連において SOA 全体の意味を総合的に解釈するからであろうと思われる。

5. まとめ

以上、本稿では動詞の意味を SOA のレベルで捉え、時制の機能を SOA を位

置づける指示と考えるべきことを主張し、文意味の構築に関わる時制と SOA の相互作用について具体例に則して捉えつつ、その意義について論じた。更に、SOA の構築には aspect や構成要素に関する世間知、使用環境、そして構文の意味との関わることを検証した。

Reference

Bybee, Joan and Osten Dahl. (1989) “The Creation of Tense and Aspect Systems in the Languages of the World,” *Studies in Language* 13, 1 :51-103.

Bybee, Joan, Rever Perkins, and William Pagliuca. (1994) *The Evolution of Grammar. Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World,* University of Chicago Press, Chicago.

Harder, Peter.(1996) *Functinal Semantics A Theory of Meaning Structure and Tense in English*. Mouton de Gruyter. Berlin. New York.

Higuchi, Mariko. (1998) “The Simple Present Tense Used as Historical Present in English,” *Bulletin of the Faculty of Computer Science and Systems Engineering Kyushu Institute of Technology* 9, 59-94.

Higuchi, Mariko. (1999) “The Role of Functional-Interactive Tools in Describing Tense in English,” *English Linguistics*, Vol. 16, No.1, 184-209.

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar vol.1: Theoretical prerequisites* Stanford University Press, Stanford.

……. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Vol.2:Descriptive Application* Stanford University Press, Stanford.

……. (1996) “A Constraint on Progressive Generics,” *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 289-302, CSLI Publications, Stanford, California.

…….(1997) “Generics and Habituals,” *On Conditionals Again*, ed. by Angeliki Athanasiadou and Rene Dirven, 191-222, John Benjamins, Amsterdam.

……. (to appear) “The English Present Tense,” *English Language and Linguistics* Volume 5, lssue 2 .

Leech, Geoffrey N. (1981) *Semantics*, Penguin, Harmondsworth.

…… .(1987) *Meaning and the English Verb* Longman, London.

Palmer, Frank R. (1974) *The English Verb*(Second edition), Longman, London.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N.Leech and Jan Svartvik. (1985) *Comprehensive Grammar of English*, Longman, London and New York.

Talmy, Leonald. (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume l: Concept Structuring Systems*. The MIT Press. Mass.

Wolfson, Nessa. (1979) "The Conversational Historical Present Alternation," *Language* 55, 168-182.

…… .(1982) *The Conversational Historical Present in American English Narrative*, Foris, Dordrecht.